
限りなく僕を高めてくれる王女

B u g o m i e l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限りなく僕を高めてくれる王女

【Nコード】

N5243Z

【作者名】

Bugomiel

【あらすじ】

ゴシック時代のヨーロッパ。

アドリア海沿岸のアルベルジェッティ王国の王子ユージーンのもとへ、隣国から嫁いできたアレグラ。

美しく、その上武術もたしなむアレグラは、義父ディビッド王を始めアルベルジェッティの人びとを魅了する。

実は武術の苦手なユージーンだが、アレグラは彼を支え、王子としてのユージーンの地位を確立させて行く。

読書家で物静かなユージーンは、やがて飛行物体の研究の結果、魔

術を操る王子とあがめられていく。
今はシリアスですが、もう少し先の「ジャコブ公爵の復讐」あたり
から勇者が登場する予定です。

王女アレグラ（前書き）

主な登場人物

ユージーン：アルベルジェツティの第一王子

アレグラ：フィオレンティーナの王女だった。今はユージーンの妃

ディビッド：アルベルジェツティの王

クラウディア：王妃

デルフィーナ：八年前に亡くなったアルベルジェツティの王女

カイル：第二王子

カプリシオーソ：結婚祝いに王がアレグラに贈った馬

パスクアーレ：王の秘書官

アルノ公爵：総理大臣

王女アレグラ

「おお、これは」

アレグラは眼下に広がる風景に思わず息をのんだ。

「まずは初めての感想を聞こう。アレグラ、どうかな？」

そこはアルベルジエッティ王国が見渡せる高い山、フォルリ山の頂だった。振り向けばこの国の国境と、その向こうに連なる荒れ地が見下ろせた。

「見張りを置くには絶好の場所ですね。義父上」

ちちじょう

デイビッド・アルベルジエッティ王は、やはりという顔で微笑した。長男、ユージーン王子の嫁アレグラを初めてこの山に連れて来たのだが、彼女なら、この美しく広がる王国の赤い屋根やその向こうに広がる紺碧のアドリア海よりも、この頂上の地の利に目を付けるだろうと思っていた。海からでも、陸からでも、この国に攻め入ろうとする者は、誰であろうとフォルリ山の頂上からの監視を逃れるわけにはいかなかった。

デイビッド王の見解もアレグラと同じで、この頂上には既に24時間態勢で見張りがおかれていた。

アレグラは幼い頃から馬が好きで、歩き始めるとほぼ同時に乗馬も習い始めた。父親のフィオレンティーニ王から許可を得て、将軍について乗馬の指導を受け、あげくは剣の手ほどきも受けていた。身軽でそこらの兵士よりは筋がよく、練習試合の相手がなかなか見つからないほどだった。

乗馬も、馬を一目見て僕しもへにしてしまふ才能を持ち、どんな荒馬でも乗りこなせるようになって、10代の始めには將軍の助手としていつも訓練のときは横についていた。戦いにこそ参戦させてはもらえなかったが、彼女は何をするにも作戦を立てて事に当たる性格が身に付いてしまっていた。

したがって、普通の15歳の王女なら、ここからの絶景とも言える美しい景色に感動するところだが、彼女の場合はむしろ、戦いにおける重要地点としての意味に関心を示したのだ。

デイビッド王は、そのいかにも頭の良さそうなターコイズブルーの瞳にじゅうぶん満足していた。彼女なら、武器を持つことの嫌いなユージーンを補佐してくれるのではないだろうか。

ユージーンも決して頭が悪いわけではない。幼い頃から参謀会議では奇抜なアイデアを提案して、味方の勝利に協力したことも何度もあった。しかし、剣の腕は弟のカイルより劣っている。ユージーンの名誉のため公の場で二人が剣を交えることは無いが、両方と相手をしている王や將軍の目には明らかだった。どちらかと言うと物静かで書物を紐解いていることの多いこの長男に王位を譲ることが、デイビッド王としては少し不安ではあった。しかし、アレグラと協力して戦いを誘導し、業績を上げれば誰も不満は無いであろう。もともユージーンは政治経済には長けていて、国を統治する力は充分にあった。

普段は気の荒いカプリシオーソが、ヒヒンと鳴き声を上げ、珍しくアレグラに首をこすりつけようとしてくるので、彼女はそれをなだめようとパタパタと首筋を軽く叩く。カプリシオーソは首を一振りして、しゃんと向き直った。

さすがだ。

愛情を込めて接しているが、決して甘やかしたりはしない。

この荒馬を、一週間もしないうちにここまで手なずけられるのは、

おそらく彼女だけだろう。

結婚の祝いに、デイビッド王が彼女に与えた美しい白馬。

一点の曇りも無い白い馬。だが、恐ろしく気位の高い馬でもあった。デイビッド王とアレグラだけは、カプリシオーソに振り落とされたことが無い。彼女がこの白馬に乗って草原を駆け抜けると、その足並みはまるでペガサスに乗って飛んでいるように思えるのだった。

――

昨日、王の誘いを受け、三人で遠乗りに出かけた時、ユージーンはこの美しいアレグラが自分の物だとはまだ実感できないでいた。彼女はもつとずつと高く、手の届かないところにあるもののように感じていた。

デイビッド王が満足そうに笑みをたたえてアレグラを見ている。今まで自分が父をこんなにも手放して満足させたことがあるだろうか。特に他の兄弟と比べて差別されているとは思わない……。いや、兄弟の誰も、こんなにも父親に愛されていないのではないか。

デルフィーナ…… 八年前、わずか七歳にして事故で亡くなってしまった妹。

デイビッド王の秘蔵っ子だった。

奇しくも同い年のアレグラに、今は亡き愛娘の面影を見ているのだろうか。誰からも愛された天使のような子だった。確かにユージーンも、アレグラにはどこか妹を思い起こさせるところがあると思っていた。

もちろん、誰もデルフィーナのことを八年間思い続けていたわけではない。ただ、アレグラを初めて見た時、誰しも心の奥にしまっていたデルフィーナのことがよぎったのは事実だった。

17歳のユージーンには、現実に今、目の前を元気良く馬と走り回るアレグラの方が、ずっとずっと力強く心に響いていた。しかもアレグラは、妹などではない。まさに彼の妻なのだ。

それは、デイビッド王にも手出しはできない、紛れもない事実だった。

ユージーンは優越感をこめ、父の後ろ姿に向けて静かにフツと笑った。

四日前までは会ったことも無かった彼女が、今はユージーンの心を大きく占めていた。

王子の結婚式

四日前、アルベルジエッティでは厳かな儀式が行われていた。

街の中心に近いサン・ヴィターレ聖堂で、アルベルジエッティ国王、デイビッドの第一王子ユージーンと、隣国フィオレンティーニ王国の王女アレグラの結婚式が盛大に執り行なわれていた。

サン・ヴィターレ聖堂の外観は重厚なビザンチン様式、そして中は、驚くほどきらびやかなモザイクで飾られた教会だった。金色がふんだんに使われたモザイクは、高貴な神や牧歌的な自然の物語を織りなす。黄金を引き立てる高貴な深緑、淡い海の緑、深い赤などがこのない色彩のハーモニーを生み出していた。その壮大な大きさとモザイクの芸術は、人びとの信仰の厚さを象徴している。

入堂の時、ユージーンは入口近くの席でアレグラを待ち、司祭に先導されて祭壇までアレグラと一緒に進む手はずになっていた。

ユージーンの待っている位置からは、司祭に連れられて教会の入口まで階段を上ってくるアレグラが見えたのだが、彼女が一段づつ脚を運ぶ度に、重いケープの裾が開いて、膝の形が絹のウエディングローブに浮かぶのが、可愛らしいようにいて艶かしく、ユージーンの心を波立たせた。

花嫁と花婿が祭壇の前に進むまで、全員起立して二人を迎える。

デイビッド王はアレグラがユージーンには過ぎた嫁ではないかと心の隅で思っていたのだが、二人で司祭に礼をした時に、一度も練習などしたわけではないのに呼吸が合って、頭を下げる長さが同じだったことに、滞りない未来を感じて満足していた。しかもユージーンの誓いの言葉が、いままでのどんなおごそかな儀式よりも堂々と

していることに、息子の力量を思い知らされたようで、少なからず驚かされていた。

司祭による祝福の祈りの後、ユージーンがアレグラのヴェールを持ち上げると、静粛なはずの聖堂のあちこちから思わず「ほっつ」というため息が聞こえた。

彼女のたぐいまれなる美しさは、人びとの胸をときめかせた。波打つ金色の髪で縁取られた真珠色の肌、深いターコイズブルーのしつとりとした瞳で見つめられると、誰もが我を忘れてしまう。唇もサクランボのように輝いていた。

デイビッド王の横で、クラウディア王妃も思わず息をのんだのを彼は聞き逃さなかった。絶世の美女と誉れ高いクラウディアをうならせるとは相当なものだ。

ユージーンはときめきを胸にしまいこみ、ヴェールを持ち上げると彼女の？に軽くキスをして、アレグラの顔をうつつすらと赤く染めさせた。いかにも女性に慣れしているデイビッド王でも、こうまで冷静にできないのではないだろうか。

ユージーンがアレグラに魅了されていなかったわけではない。ただ彼は、必要な時に心を切り離して集中する術を心得ていただけだ。

指輪の交換、証書への署名を滞り無く行ない、聖歌によって式典は無事終了した。

式典の後のパレードで、本来ならばアレグラは裾の長いドレスを着て馬車に乗るところだが、ギリシャの神のように仕立てられた衣装で馬にまたがり、ユージーンと並んで二頭の馬に乗って国民の祝福を受けた。さすがにこのときはまだカプリシオーソには会ったことも無かったので、他の馬が使われた。晴れの舞台で、王子の妃が民衆の前で落馬でもしたら大変なことになる。

民衆の反応は驚くほど盛り上がっていた。

二年前にユージーンの姉コンスタンツァが北の国へ嫁いだ時は、こんな騒ぎは起こらなかった。王女が旅立つことと、王女を花嫁として迎えることには大きな違いがあるが、まあ正直に言つて、コンスタンツァとアレグラとは輝きの度合いが違う。実は、母親似のユージーンの方が姉よりも妖艶さにあふれていた。透き通るような金髪を長く伸ばし、後ろになびかせている。目を伏せると睫毛が影を落とし、高貴な雰囲気には溢れていた。もし花嫁がこれほどに輝く美女でなかったら、花婿の美しさの方が際立っていたかもしれない。

美しく強いアレグラに、人びとは希望を抱き、夢を膨らませた。少なくともフィオレンティーニと戦争をすることはもう無いはずだ。フィオレンティーニはアルベルジェッティに等しいとも言われる大國だった。それが敵になる恐れが無くなり、それどころか他國との戦争の際に味方になるというのは、国民にとって大きな希望だった。だから、この婚礼に恨みを持つ者はまずいないとみて、馬車に乗らなくてもよいという結論に達した。

「皆に手を振ってあげなさい」

ユージーンが耳元でささやくと、アレグラは右手を上げて静かに手を振った。民衆からは地響きのような歓声が沸き上がってきて、若い二人を戸惑わせた。

だが、これはただの結婚式なのだ、二人は自らに言い聞かせていた。デイビッド王はまだ39歳、彼の統治力にはみんなが信頼を寄せていた。王の引退はまだまだ先のこと、若い二人が表立って執り行なう出番はまだ少ない。

銃のない時代だったが、それでも弓矢で狙われる危険性はある。そ

こは、かねてから訓練をつんで来たアレグラならば、身を守ることが出来るだろうということに許されたパレードだった。もっとも、たとえ馬車に乗っても、祝い事用のものは屋根の無いオープンスタイルだったから、狙われる危険はさほど変わりはないかもしれない。もともとパレードの目的とは花嫁を国民に親しみを持たせることで、その意味ではこれ以上無いほどに開放された行進だった。

彼女が横にすることが、自分の威力をこれほどに増すことの意味を、ユージーンは深く心に刻んでいた。

婚礼の宴

結婚式から一週間後、宮殿ではユージーンとアレグラの結婚披露の宴が行なわれていた。

国中の貴族が宮殿に集まり、二人に祝いの言葉を述べる。

庭は飾り付けられ、すべての噴水は勢い良く水しぶきを上げていた。のどかな春の日、数多くのバラが咲き乱れ、甘い香りが狂おしいくらいに漂う。

食事の後、クラウディア王妃のハープ演奏が披露されたが、今日はアレグラのお披露目ということもあって、彼女も演奏しなくてはならない。デイビッド王が頷いて、アレグラはしかたなくハープの前に座った。

実を言うと、ダンスはともかく、楽器演奏はアレグラの苦手分野である。一応子供の頃から宮廷における様々な教育を受けてきたが、彼女は、静かに女の子らしいことをするのは不得意としていた。特に、皆に注目される場所での演奏などもってのほかだ。こういうこともあるうかと覚悟はしていたが、今は恐ろしく緊張していた。先ほどのダンスのときは、アレグラの軽やかな足取りにみんな感嘆していたが、ここで失態を見せればその好印象も台無しにしてしまう。

深呼吸して弦をつま弾き始める。導入部分は滑らかだったが、しばらくすると音が飛び出し始めた。

その時彼女は、滑らかなハープの音色が入ってくるのを耳にした。

「そのまま、続けて」

斜め横にあったもう一台のハープを、ユージーンが弾いている。全く同じ旋律を奏でるのではなく、時には伴奏のように、また時にはアレンジして彼女に合わせている。それはまるで、気のあったハープデュオの演奏だった。アレグラも、彼が加わってからは、肩の力を抜いて自分らしく生き生きと競演を始めた。

二台のハープは響き合い、人びとの心を誘う。二人の手は、最後の音を奏でると同時に宙に止まった。観客のほとんどは、それがもとと準備された二重奏だと信じて拍手をおくっていた。

「見事な演奏でございました」

賞賛したのは、総理大臣のアルノ公爵だった。その微笑の裏に何か隠されているように感じるのは、アレグラのハープの腕をからかっているのだろうか。心の読めない人だ。

後で、庭に出てカプリシオーソに乗り、見事なジャンプを披露して称賛を浴びるアレグラを、静かに見守るユージーンの傍に母親のクラウディアが近づいた。

「しょうがない人ね、普通は女のたしなみというものは逆なのだけれど…… あなたも乗馬より楽器が得意で、二人は案外均衡がとれているのかもしれないね」

「彼女は、屈託のない人です。母上にとっても、付き合いやすいことでしょう」

クラウディアは優しく笑いかけた。

婚礼の宴（後書き）

主な登場人物を、第一部の始めに載せました。

カプリシオ・ソの嫉妬

「ユージーンさま!」

アレグラは部屋の扉が開くと同時に、彼のもとに駆け寄りひざまずいた。

「お怪我は重いのですか?」

心配そうに顔を曇らせる。

「いや、足首をくじいただけだ。心配は要らぬ。すぐに治ると医師も申しておる」

ユージーンは長椅子に寄りかかり、その足首には湿布をしてあるが腫れているのがよくわかる。

「どうして、カプリシオ・ソに乗ろうとなど、なさったのです?」

クラウディア王妃からハーブのレッスンを受けていたアレグラだが、ユージーンがカプリシオ・ソに振り落とされたと聞いて、すぐに彼の元へ駆けつけた。

「別に、そなたを羨ましく思ったわけではない。ただ、そなたが乗ると風のように駆けて行くのを見て、その仕組みが知りたいと思っただけだ。」

「しくみ……ですか?」

「ああ、あの羽の模型を取ってくれぬか」

アレグラはユージーンが指差した棚の上の、鳥が羽を広げたような形の模型を手取る。

「これは!？」

「以前から、飛行物体の研究をしているのだが、まだ飛距離が出なくて悩んでいたところだ」

「それは、凧のような物ですか？」

「いや、凧は糸の長さ以上に遠くへは飛べぬ。私が考えているのは、風に乗ってどこまでも飛び続けることができる物体だ」

ユージーンは、先日、遠乗りの時にアレグラが飛ぶように馬を走らせるのを見て、走る時に、いかに多く風を受けるかに、飛ぶコツがあるのではないかと感じていた。しかし、試すのならば乗り馴れた自分の馬で実験すべきだった。カプリシオーソで試みたのが大きな間違いだった。

「でしたら、おっしゃって下されば、私が走って見せましたのに…カプリシオーソはあなたに嫉妬しているのです」

「私に？」

「彼は、驚くほど気位の高い馬です。デイビッドさまと私以外、誰も受け入れません。特にあなたのことは、私の夫だと意識して、快く思っていないのです」

「そんなものなのか。馬の心というのは…」

アレグラは湿布を冷たい物に取り替えた。まだかなり熱を持っている。

「痛みますか？」

「いや、動かさなければ大丈夫だ」

「それにしても飛行物体とは…… そんなことが本当に実現可能なのでしょうか？」

「それはまだ、誰もわからぬ。未だかつて成功した者はいない……」

ユージーンはそう言って、窓の外遠く、空に浮かぶ一筋の雲をみつめた。まるで、そこを目指して登って行けば、やがてその雲に手が届くと思っているかのようだ。アレグラは彼の瞳に、自分にはない遠い夢を感じ、いつになくユージーンをいとおしいと思った。彼女が手を差し伸べると、ユージーンはためらいなく両手で受けとめる。

「痛めたのが手でなくてよかった。まだこうして、そなたに触れることができる」

そう言いながら、愛おしく彼女の髪に触れると、じっと見つめるアレグラの熱い瞳に促されて口づけた。

魅惑の苦い薬（前書き）

ユージーンのイラストをアップしました。

魅惑の苦い薬

宮廷の執務室で仕事中のデイビッド王は、ほろ苦い香りに書類から顔を上げた。

アレグラがコーヒーを侍女に運ばせて入ってくるどころだった。

「義父上、お邪魔いたします。　コーヒー豆の使用許可をいただきましたお礼に、お好みに合うように深く煎ったものを、義父上にもお持ちいたしました」

この時代、コーヒーはまだ一般に広まっていなかったが、宮廷の庭には、昔、デイビッドの父親が王だった頃、遠くエチオピアから訪ねてきた使いが持ってきたコーヒーの木が植えられていた。

アドリア海に面した地中海岸式気候のアルベルジュティでは、その木が無事育って毎年赤い実をつけている。貴重なその実は、そのほとんどが薬用として用いられていた。乾燥させ、煎ってすりつぶした実を布で漉して抽出する。その苦い液体を、まだ人びとは嗜好品として楽しむには至っていなかったが、デイビッド王とユーージン王子だけは苦い味を気に入っていて、何か特別な理由があるとコーヒーを入れて楽しんでいた。ただし、果肉の赤い実は甘く、王妃も子供たちも楽しんでいたが、その種こそが貴重であることを、エチオピアの使いは強調していた。

「ユーージンの具合はどうだ？」

「コーヒーを飲みながら王が訊ねる。」

「はい、おかげさまで順調に回復いたしております。今夜から、また皆様とご一緒に食事ができるかと存じます」

怪我をしてから、アレグラは甲斐甲斐しくユージーンを看病し、ディナーテーブルに来られない彼に食事を運ばせ、アレグラ自ら食べさせたりしていた。

食事は家族全員で揃って取るのだが、初めてユージーンの同席していない晚餐に、アレグラはことのほか淋しさを味わっていた。ユージーンもそれを分かっている、侍従の助けを借りて三日目からディナーテーブルに着くことにしたのだ。

彼女はそんなにも息子が気に入っているのだろうか？ まるで性格の違う二人にも見えるのだが、積極的な彼女には物足りないのではないだろうか…… いや、それにしてもアレグラは、ユージーンといる時いつも楽しそうである。

「ユージーンさまは何ごとにもよくご存知で、本当に聡明なお方でございます。このコーヒーにつきましても、入れ方を私に直々に手ほどきくださいました」

どうやら珍しいことには何にでも興味を持つアレグラの性格が、その点では完全にユージーンと一致したようで、ふたりはいつも一緒に飛行物体の研究やら珍しい食べ物を試したりやら、新しいことへの探求に余念がない。ここ数日、アレグラがカプリシオーソを走らせ、ユージーンが何やら記録しているのを見かける。やがてこの国を引き継ぐ王子と妃なら、他にすべきことがあると思うのだが…

「大変結構であった」

デイビッド王はカップとソーサーをお盆に戻した。

アレグラと侍女がお辞儀をして退室すると、秘書官のパスクアーレ

が控えめに述べた。

「ユージンさま達お二人の仲が順調に行っているようで、なりよ
りでございます。くれぐれもフィオレンティーニ王国とは、和平を
保ちたいものでございます」

「それは、嫌みか？」

「いいえ、滅相もございません」

????

昨夜、パスクアーレ秘書官がこの部屋を訪れた時、侍女があわてて
走り去るところを見かけた。

「似ていますね」

「何のことだ？」

「デイビッドさまがアレグラさまに関心をお示したのは、亡くなら
れたデルフィーナ女王様の面影を、偲んでいらっしゃるのではな
かったのですか？」

さつき走り去った侍女はどこもなくアレグラに似ていた。服装の乱
れを正していたところから見ても、王が手を出したのに違いない。
それでなくとも、キリスト教徒は一夫一婦制だ。クラウディア王妃
の耳に入れば大変なことになる。しかも、長男の嫁に良く似た愛人^{ミストレス}

などとんでもない話だ。

「まさか、アレグラさまに……」

「何もよこしまな心など抱いていない！ あの者は、どこもアレグラに似ていないではないか」

確かに、息子の嫁に手出しをするよりは、良く似たミストレスをはけ口にしてくれた方がずっとましだとパスクアーレは思った。とにかく、どんなことがあってもフィオレンティーニとの争いは避けなければならぬ。

「くれぐれも、あの女の存在は、王妃さまやユージーンさまには知られませぬよう、お気をつけ下さいませ」

秘書官はしっかりと念を押した。

???

ユージーンに差し出されたカップを受け取ると、アレグラは香ばしい香りを十分に味わい、コーヒーをひとくち口に含んだ。その茶色の液体は、深くアレグラの心にしみ込み、清々しい風を運んできた。

「深みがあつて美味しい飲み物ですこと。少しだけフルーティな酸味もありますね。喉を通った後、とても爽やかな味が残ります」

「この苦い飲み物が気に入った女性は、おそらくそなが初めてである。」

本当に珍しい女性だとユージーンは思う。母や弟などは、病気のときの薬としてもそのままでは飲めず、牛乳を入れて何とか飲み込んでいた。

アレグラの瞳のきらめきが、夫に無理矢理あわせているのではなく、心からこの飲み物を楽しんでいることを証明していた。

親に決められた、いわば政略結婚だが、美しいだけでなく、よくぞここまで興味深い妻がいたものだ。ユージーンは驚いていた。彼女といれば生涯退屈などすることはないだろう。

「これからは、父上や私がコーヒーを入れる際には必ず、そなたの分も作らせよう。」

「まあ、よろしいのですか？」

「もちろん。父上もそなたの喜ぶ顔が見たいだろう。」

「嬉しい！」

そう言っただけで思わずユージーンに抱きつくアレグラだが、すぐ我に返って手を離れた。

「申し訳ございません。」

ユージーンはただ黙って笑っている。

父が彼女の喜ぶ顔が見たいというのは本当だ。いや、むしろアレグラを喜ばせるためなら何でもしそうで、先が見えなくて不安ですらある。あの人をあまり熱くさせないように、コントロールしなくて

はならないだろう。

結婚の祝いに王が彼女のために作らせた、ダイヤやエメラルドの豪華すぎるネックレスも、政治家たちからつるさく言われそうな代物だった。

> i 3 7 5 4 7 — 4 3 1 7 <

権力を握る者

宮殿の裏手の草原でアレグラは馬を走らせていた。

ユージーンも自分の馬に乗ってそれを見ている。彼の足は馬に乗れるくらいには回復していた。

カプリシオーソにはペガサスのように翼が取り付けてある。内側にパニエのように広がる枠をつけて、胴体から翼が生えているように見える。風を受けるために二人で考えだした装置だ。

確かにそれを身につけていると、彼女が干し草のハードルを飛び越えた時ふわっと宙に舞い、滞空時間がわずかに長くなる。

何度目かのジャンプの後、戻ってきたアレグラは宮殿の方を見た。

「デイビッドさま」

ユージーンが振り向くと、父親が近づいてくるのが見えた。

「おはようございます。父上」

「おはようございます。義父上、ご機嫌はいかがですか？」

アレグラも急いで駆け寄る。

「うむ。それは何だ？」

デイビッド王は、カプリシオーソをあごで示して訊ねる。

「これは、まだ内密ですが、新しい兵器の研究です」

アレグラは初めて聞くユージーンの言葉に、驚きの表情を隠せなかった。

デイビッド王が聞き返す。

「兵器だと？」

「はい。馬を飛ばせるものではありません。羽だけで、鳥のように空を飛ぶことのできる物体です。まだ人を乗せることはできませんが、戦いの不意をつくにはうってつけの武器になるでしょう」

「ほう」

デイビッド王の不機嫌そうだった顔が変わった。

「今は翼の形を決めているところでございます」

「それは、いつ頃完成する予定なのだ？」

「はつきりとは申せませんが、おそらく2〜3か月のうちには、試作品をお見せできるかと存じます」

「ふむ…… 心待ちにしておるぞ。実は、ここへ着たのは明日から始まる議会について、お前に知らせようと思ったのだ。体調はもう良いのか？」

「ええ、おかげさまで。カプリシオーソとは、正に名前の通り狂想曲のような馬です。アンダントと名付られていたら、私も振り落とされずにすんでいたかもしれません」

ユージーンの言葉にデイビッドは苦笑いする。カプリシオとは形式の定まらない狂想曲という意味で、アンダンテは歩くようにという意味だが、ユージーンは、狂想曲を乗りこなせなかった自分を皮肉っている。けれど、アンダンテでは、風のように駆け抜けることもかなわなかったに違いない。

「明日は裁判所の長官を決める大事な会議、もちろん出席いたしません。身内に裁判所長官を推している総理大臣を、何としても引き止めねばなりません。阻止するための資料は、万端にそろえてございます」

「うむ、わかった」

デイビッド王はくりりと馬の向きを変えると、宮殿へ戻って行った。

「それは本当なのですか？」

アレグラは大きな目を見開いてユージーンにきいた。

「この飛行物体は戦^{いく}のためだったのですか？あなたは、戦争がお嫌いだと思っておりましたのに……」

「確かに、そういう目的で始めたのではないが、ああでも言わなければ、父上にすべてを取り上げられていたやもしれぬ。私は、目的のために手段は選ばぬ男だ。この研究は続けねばならん」

「それで、人を殺すことになっても構わないと……」

「多くの人を殺すとは限らない。むしろ、人を殺さずに戦いを早く終わらせる役目を果たすかもしれぬ。そなたこそ、戦が得意だと思っていたが、そういう否定的な言葉を聞こうとは思っていなかったぞ」

「……私は、ただ馬に乗るのが好きだけです。武術はそれに追随するたしなみのひとつに過ぎません。父が女の私でも振り回せる剣をわざわざ作らせたので、それに応えるために習っただけです。好きでやっているわけではございません」

アレグラは質問を続けた。

「それでは、裁判所の長官のお話は、何のことなのです？」

「あれは、本来なら司法、立法、行政の三権は分立していなくてはならない。なのに総理大臣は、自分の息子を裁判所長官の座につけようとしておる。そんなことが実現したら、父上の座を脅かしかねない。まあ、大臣のこれまでの業績は調べてあるから、攻撃する材料には事欠かないが……とにかく、総理大臣の思い通りには、私がかさせまい」

そういう話をしているときのユージーンはずっと大人に見えた。デイビッド王も彼を信頼している様子だ。飛行物体の研究をしているときは、情熱を帯びた子供っぽい目をしているのに、政治の話になると、まるで人が変わったように冷静になることができる。

アレグラはまだ知らない面のたくさんある夫に、知り合った頃よりもっと魅かれて行く自分を感じていた。

「あなたは、素晴らしい才能をお持ちですね」

「残念ながら、武術は得意ではないが……」

「上に立つ者が、もつとも優れた武術家である必要はございません。才能のある兵士を、いかに有効に使うかが大切なことかと存じます」

「そうは言っても、剣を使えない者は尊敬を受けなかったりもするのだよ。まあ、私は別に気にかけていないが。主人の才能を侮るものに信頼を置くつもりはないからな」

「あなたがこの国一番の読書家なのは、周知の通りでございます。国は頭脳で操るものだということを、いずれ証明してみせれば良いではございませんか」

口にこそ出さなかったが、アレグラは、ユージーンがいつか、ディビッド王よりも優れた王になることを密かに予感していた。

強制捜査

翌日、議会では、アルノ総理大臣が自分の息子を裁判所の長官に推薦しており、投票前に、質疑応答が行なわれているところだった。

「総理の経営する事業の経理報告について、不正があるという報告を受けているのだが…」

ユージーンが質問すると、アルノ首相は顔を引きつらせた。院内はざわめき立ち、議長が声を上げる。

「静粛に！」

ユージーンは議会が落ち着きを取り戻すのを待った。

「ここに、国に提出した昨年までの会計報告がある」

ユージーンは、数束の書類を机の上に置く。そして、別の束を取り出して、その隣に置いた。

「そしてこちらが、金融機関に提出した会計報告、この二つの間には、かなりの数字の違いが見られます。その理由を、ご説明願えますか？」

アルノ総理の顔は蒼白になった。とりあえず、発言席に着いたが、言っていることがしどろもどろ、全然、的を得ていない。

ユージーンはしばらく、首相のうろたえる様を楽しんだ後で言った。

「結構です。明日、王の承認を得て会計監査員を送るから、それま

で会計報告には一切手を触れぬように。それから、もしその不正が事実であるとすれば、その子息に裁判所の長官の役を命ずるのは、如何なものか。長官の選任は会計監査の結果を待ってからとすべきでしょう。よろしいですか父上？」

デイビッド王の承認を得て、議会は終了した。

— —

その後、ユージーンはデイビッド王と執務室で話していた。二人きりの極秘な打ち合わせで、秘書官のパスクアーレにも席を外させた。

「それは確かなのか？ 総理が不正をしていたというのは」

「確かな筋からの情報です。彼の経営する貿易事業は、黒字を赤字といつわって、ここ数年税金を収めていません。これは国家への冒涇であり、追徴金は多大なものになるでしょう」

「なぜそのことを、前もって私に報告しなかったのだ？」

「もちろん、父上を信用していないわけではありません。しかし、それを誰に聞かれないとも限りません。どこにスパイが潜んでいるか分からない世の中ですから」

限りなく冷静なユージーンの顔は、もはや17歳の青年のものとは思われない大人びたものだった。

「とにかく、アルノ総理親子は、父上の座を脅かすともない連

中です。彼には総理大臣を降りてもらって、ベルリー二侯に引き継がせるべきかと存じます」

「ベルリー二か…」

デイビッド王は、いつも眠そうな、まだ若いのに禿げかかった侯爵の顔を思い浮かべていた。どうも、総理大臣の器うつわではないような気がして、ためらっていた。

「彼が外国大使だった頃の功績を覚えていらっしやるでしょう。政治に必要なのは頭脳です。髪の毛ではありません」

ユージーンはそう言って立ち上がると、扉を開けてパスクアーレに入ってよいと告げた。

パスクアーレは、入ってくるなり恨めしそうな目を向けた。

「そう不機嫌な顔をするでない。お前を信用していないのではなく、命を守っているだけなのだからな」

デイビッド王は秘書官をなだめている。

王と王子が秘密の会議をしている間、秘書官が閉め出されたことは、多数の議員に知れ渡っている。したがってパスクアーレが敵に捕らえられたり、手に入れた秘密を打ち明けるよう迫られたりすることはないはずだ。

?????

翌朝の強制捜査では、アルノ総理の貿易事業に二重帳簿が発見され、彼はまもなく逮捕された。やがて、選挙でベルリーニ公爵が総理大臣に選ばれ、裁判所の長官はアルノ家とは全く関係ないデ・ルーカ伯爵が選出された。

しばらくの間議会は大混乱で、これらのすべてが落ち着いて、新しい総理と裁判所の長官が任命されるまでには、二か月近くの月日を要した。

この一件以降、ユージン王子のことを静かすぎて能力のない王子だと思ふ者は、誰もいなくなった。

強制捜査（後書き）

いよいよ次の章から、怪奇なストーリー「ジャコブ公爵の復讐」が始まります。

奇怪な叫び声

街の外れからさらに奥深く、うら寂しい沼のほとりに、妖美なサレ館は建っていた。

蒼い満月が館の屋根に不気味な光を落とす。地上には沼から立ち上る濃い霧が立ちのぼり、あたりをしだいに飲み込んで行った。

屋敷の裏手の鬱蒼とした森ではフクロウが低い声を上げ、それは悪魔に送る合図のように木々の間を縫って木霊した。

夏の終わりとは思えない肌寒さだった。

その時だった。

ガサゴソ、ガサゴソ

突然木立の中から、木の葉を踏みしめる足音が近づいてくる。

慌ただしく動く、数頭の獣けものの足音が、森の外れを行ったり来たりしていた。

霧は、刻一刻と深く立ちこめて行く。地上を闇で包んで行く霧は、やがて月までのぼって行った。

今や、月は雲に包まれようとしていた。忍び寄る闇が館を陰でおお

沼のほとりの葦の間を風がすり抜けて、笛の音のようなさすれた音を立てたすぐ後のことだった。

「ウアオーーン」

狼の遠吠えにも似た、闇を切り裂く鋭利な声。

森の奥などではない、すぐ近くだ。
身の毛もよだつ叫び声に、獣の足音は慌てて走り去った。

アレグラ VS ・ カイル (前書き)

ユーザと全然タッチが違ふんですけど、アレグラのイラストをアップしました。

アレグラ VS . カイル

街の外れに近いジャコブ公爵の館は、サレ館と呼ばれ、王宮を手がけた職人によって作られた、建築芸術の粋をつくした美しい館だった。以前は塩税徴収官の住まいだったので、塩館^{サレ}と呼ばれている。

最近サレ館のあたりでは怪事件が持ち上がっていた。夜になると、この辺りの農家から家畜が盗まれるというのだ。

先日は、ジャコブ家特有の斑模様のある羊がさらわれ、国境はずれの森で遺体となって発見された。そしてその夜、館からは奇妙な叫び声が聞こえてきたというのだ。叫び声は真夜中を過ぎた頃、裏の山にこだまして当たりに不気味に響いていた。住民は、怖くて怯え上がっている。

王宮の執務室では、デイビット王とユージーン王子が司法長官と秘書官の報告を聞いていた。

「……それで、目撃者はいないのか？」

「どうやら、羊は夜のうちに連れて行かれたようです。闇に紛れて、フォルリ山の見張りも何も見ておりません」

「いなくなったのが三頭で、そのうち一頭が遺体で発見されたわけか」

「おそらく、途中で騒いだか、逃げ出そうとしたものかと思われるます」

「森の方角だとランディー二王国の者ですか？」

「その結論はまだ早い」

パスクアーレの推測を押しとどめたのは、デイビッド王だった。一見、熱くなりがちな性格に見える王だが、長年の経験から、隣国と戦争を始めるようなことは慎重にならざるを得ない。争いの始まりはいつも些細なことなのだ。だがその問題も、対応の仕方によっては争いを起こさずに解決できる。デイビッド王は対外的な取引については、時によって、プライドを捨てて下手に出ることも甘んじた。尊大なデイビッド王が下手に出るのは、物静かなユーージーンが強い態度に出ることと同じくらい効果があった。

窓から見下ろすと、宮殿の庭ではアレグラとカイルが剣の練習をしていた。

カイルはアレグラよりひとつ年下の14歳、まだ幼いがなかなか剣の筋は良かった。手強い相手にアレグラは息を切らしている。

12歳の妹、リディアと、9歳の弟、アウグステイーノが二人を真剣に見守っていた。

カン、カン、カン！

刃のぶつかる音が建物に響く。

さすがにカイルの力は強く、剣のぶつかる衝撃を感じるたびに、アレグラの手首にしびれが走る。アレグラは付け入る隙を作らせないように、身軽に飛んで攻めていた。

ぶんっ

刃が鋭い音を立てて空を切る。アレグラは危ういところで後ろに飛び退いた。

どう見ても体制が良くない。両手で剣を構え直したところへ、容赦なくカイルが大きく一撃を振り下ろす。

ガシッ

アレグラは何とか支えたが、勢いをつけて押し返すことができないでいた。カイルの剣がきらりとひらめいて回転し、反対方向からアレグラの刃をはじいた。

カシーン

高い金属音がして、アレグラの剣が宙に飛んで行った。

「うっ」

アレグラは手首を押さえる。 剣は回転しながら宙を舞い、鈍い音を立てて地面に落ちた。

「大丈夫ですか、姉上？」

「ええ。さすがにあなたには、かないませんでした」

14歳になったばかりとは言え、アレグラより背も高く、力も強いカイルが勝つのは当然と言えば当然である。幼い頃から、高度な技術を持つ騎士たちによってかなりハードな訓練を与えられてきた王

子だ。

「勝ったご褒美に、カプリシオーソに乗らせていただけますか？」

「さあ…… それはどうでしょうか……」

ためらうアレグラに構わず、カイルはカプリシオーソのあひみ鐙あひみに足をかける。

「心配にはおよびません」

と、鞍にまたがった瞬間、馬が乱暴に駆け出して、瞬く間にカイルは振り落とされた。

「カイルさま！」

アレグラが、駆け寄ったが、すぐ後ろからユージーンが歩いてきた。

「いつてえ」

幸いカイルはたいしたことはないらしく、腰をさすりながら立ち上がる。

（くそ、あの馬め……）

「幸いにして、ケガはありません…でした」

苦しそうに声を絞り出した。

ユージーンが、カイルの腕をがっしり掴み、よろけそうになるのを

支えた。

「カプリシオーソの目の前で、アレグラを負かしたであろう。相当お前に恨みを持っていると見える」

ユージーンは、カイル以上に鼻息を荒くして興奮しているカプリシオーソを見上げた。

> i 3 7 9 4 3 — 4 3 1 7 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243z/>

限りなく僕を高めてくれる王女

2011年12月29日10時57分発行